



リステラス星圏史略
古資料ファイル
1 - 2



『創球神話』

(発掘整理一旦完了)

霧樹里守 is 土岐真扉

『 創 球 神 話 』

2. 水球儀 ー水球大陸興亡記ー (2009年)

2. 水球儀 ー水球大陸興亡記ー (2009年)

2016年7月13日 リステラス星圏史略 (創作)

2. 水球儀 ー水球大陸興亡記ー

2-1.

かくれたる神ティアスラアルが岩の塊をただつくねたまま放り投げたその界に、なだれ落ちてきたあまたの水が、岩々を沙や沙にまで粉々に下いたあとも、しかしもとより界の構成者であった岩たちはこりずに軽重を問い、大商をえらぶあらしに熱心であった。

ためにより重くより巨きものほど界のうち芯を占め、やがてために軽き水たちはその辺縁部にのみはじきためおかれた。

水におおわれたその岩塊に、ついで姉界兄界からくずれ落ちて来たのは、ありとあらゆるものであった。

ほろびた長姉界からは行き場を失い、しかし生きながらえた翼もつ慈悲深き者たちや、また知恵深き聖なる人々や仙なる者たちが命からがら舞いおりて来た。

また長兄界と次妹界の争いに際しては、界のはざまを切り分けて壁をきずく、その上神界による大いなる処断のために、大き亀裂のすきまから、あまたの獣や人や鳥たち魚たちが、くだけ落ちてきてしまった。

(文章再考!)

☆大きな水がぶつかったこと。(岩群界(塊)⇒泥球界)

☆重きことを重んじる岩人たちによって、水精らは辺縁部に追われたこと。

☆ちつじょが定まる間もなく姉兄界断絶のはざまから各界属たちがおちてきたこと。

☆重きを重んじる胎洞界竜や亀らは岩にくいこみ、彼らの炎によって泥球の中心に熱が生まれ、

亀と竜による渦がうまれたこと。

☆重きを軽んじる翼ある者や自由を求める者たちは、水界よりも上（外）を好み、重くも軽くもない水精らはハザマにとどまったこと。

☆姿なき神ティアスラアルはただそれを見ていたこと。

p5.

2. 水球儀 —水球大陸縁起— 2-2. (2009年)

[2. 水球儀 —水球大陸縁起— 2-2. カクリ神とカタリ神 \(2009年\)](#)

2016年7月15日 [リステラス星圏史略 \(創作\)](#)

2. 水球儀 —水球大陸興亡史縁起—

2-2. カタリ神とカクリ神

神は姿をあらわさず、彼らが何をしようとも、いさめるということがなかったので、彼らは日に夜にゴウマンにふるまうようになった。

力弱き水の霊たちは岩たちや洞たちの子を産まされた。

ありとあらゆる姿の獣たち精たち霊たちが、あまねく地と水と空とに満ちた。

あかるくつよき黄金の光まとうたけき邪神が、ある時、見のほど知らずにも太陽の神と名乗ったが、やはり見るだけの神ティアスラアルは姿あらわすことなく、やがてこのお調子のりの僭称王を要として、力あり我欲もつ精たち獣仙たちが、神界上神界を模した宮廷をつくり偽神界となした。

偽神界の偽陽神が、あるとき泡のごとくこまかくいやしき水精の娘を見そめ、むりやりに仔をなさしめた。

一の子たちは無数の卵にて生まれ、あまりにもよわくみにくくなさけなかったので父神はこれをふみつぶし、二の子をもうけさしめた。

このときふみつぶされのこした一の子ののこりのすえから、水球大陸のすべての四つ足たちの祖が生まれ、二の子のすえから、すべての二つ足たちと翼鳥たちの粗が生まれた。

水のすえむすめなる母水が必死で泥をこねあげおしあげて、彼らが息のびられるよう、ひからびぬよう、心をくだいた。

随神、卑神、
半神、半魔、
俗仙、妖仙、

妖獸、精獸、

偽（似）神界
（似非）

2-3. カクリ神とカタリ神 (2009.04.03.)

2-3. カクリ神とカタリ神 (2009.04.03.)

2016年7月15日 リステラス星圏史略 (創作)

2-3. カクリ神とカタリ神

偽陽神が水精の末娘をむりやり犯して産ませしめたこの子らは、その父神に似て、母に対してたいそうゴウマンにふるまった。

彼らは同じ卵から生まれたオヤコキョウダイシマイで犯しあいころしあいはみあいののしりあらそいあいながらも、しだいにその数をどんどこと増やしていったので、水の島はしだいに手狭となり、コらのおしあいへしあいいあらそうことますますはげしくなったので、水の母はそれを見ますます胸を痛め、ますます心をくだいて泥の亀をおしあげへしあげ持ちあげて、水面の上にんぞく部分をせさせ必死と増やしてやった。

するとそれを見てコらはよろこび、しかし感謝などするどころか母をムチ打ちせめたてて、もっともともと、かわいた土地をねだった。

母はあるときとうとう、コらを見すてて深い海へと戻ってしまった。

偽神界の者たちがおもしろがって彼らを犯し殺し、くい、つつきまわし、またたわむれに知恵や技術をさずけたが、彼らもまた、いつまでたっても2本足で地をはいずるばかりで、空を飛べもせず水に泳ぐこともないコらにあいて、しだいに姿をあらわさなくなってしまった。

2-4. 《神殺し》の王の成立 (2009.04.05.)

2-4. 《神殺し》の王の成立 (2009.04.05.)

2016年7月15日 リステラス星圏史略 (創作)

2-4. 古王国《神殺し》の王の成立

さて、姿なき神ティアスラルの存在すら知らず、偽神たちからさえあきらめた彼らは、数世代を経ずして神々の実在を忘れたが、しかし、神々から受けたしうち...すなわち、きままな暴ぎやくや、ほしいままの収奪など...は、忘れられることなく、コら同士のあいだで強い者と弱い者との序列をきそい、あきることなく、くりかえし再現されるギ画となった。

それはさながら、彼らのついぞあずかり知らぬ、岩たちと竜たちの狂宴のようでもあった。

ある時、彼らのあいだで「神」とは、あったのかなかったのか、言い争いが成じた。

ある者は、じじいのじじいの時代には、たしかにあった者たちだと言い、ある者は、じじいのじじいのばばあの時代に、コらをかつぐためにつくりだされた、うそこのおとぎ話だと言った。

「神などおらぬ。いたとしても、たいしたものでもあるはずがない」

コヘムと呼ばれる男が言った。

その時、天がふるえ地がうなった。

みなは神がコヘウを聞き、怒ったのだと言った。

コヘウはなおも言った。

「ならば、そんなものオレがたおしてやるさ」

その時、地のうなりにおどろいて森の奥より、いまだかつて誰も見たことのなきような巨大な巨大な石竜があらわれた。

人々はおじおそれにげまどったが、コヘウはこれを叱たし、数多のコらを召し使ったたかい、ついには石竜をたおした。

人々はコヘウを「神殺し」（オ・ウ）とたたえ、やがてその呼称は、その子カヘウに、その子々孫々にと伝えられ、彼らを中心に大陸の東に古王国が成った。

2-4. 古王国と新王国 (2009.04.06.)

[2-4. 古王国と新王国 \(2009.04.06.\)](#)

2016年7月15日 [リステラス星圏史略 \(創作\) コメント \(1\)](#)

2-4. 古王国と新王国

神を殺した王の子らと親族に眷属、家臣や逆賊などは互いに相争い、新王だの副王だの独立だの統合だのをくりかえしながら、しだいに大陸の東にその版図を広げていった。

相争う彼らの暮らしを支えるために多くの者が農奴として使えきされ、その農奴を監視するための役人階級が生まれ、その役人たちの造反をふせぐためと他国の王との殺し合いとのために武力で争うことをなりわいとする職能集団、軍隊とが生まれた。

そんなふうにして大陸の南に古王国群がふくらみ、もぞもぞしてゐるをくりかえしていたある日、彼らの版図の東に、空から星の船がおちてきた。

星の船は青みを帯びた銀の色の巨大な山のような山のような船で、天より地に落ちて深く深く地に穴をうがった。そして二度とは空に帰れぬほどにこわれてしまったが、星の船の星の人々は幸いみな生きて地にとりついた。

星の人々は星の船のまわりに新王国をきずき、星の船からまいた種が新しく大樹の森に育つと、その国はへき葉国と呼ばれるようになった。

これを見て名もなき古王国群の王たちは国の名というものをたいそううらやみ、これよりのち、大陸のすべての国にはそれぞれの美名を冠して呼ばれるようになった。

へき葉国の人々は相争うことを好まぬ人々であった。

彼らは高き技術と美しき文物をもって旧王国の人々との交易をこころみ、またすすんで他国へ嫁し、また養子養女やムコ嫁をむかえた。

ゆえに古王国の人々もしだいに新しい国のやりかたになじみ、あいあらそうことをひかえ、交易やカケヒキによって、その版図をひろげ、またやりとりし、守った。

p 8 090406

2-5. 帝国と《谷の一族》 (2009.04.11.)

[2-5. 帝国と《谷の一族》 \(2009.04.11.\)](#)

2016年7月15日 [リステラス星圏史略 \(創作\)](#)

2-5. 帝国と"谷の一族"

あまたに分かれた旧王国の数々は、へき葉国のすすめたゆう和外交と婚姻と相続の果てに、やがて、ただ一人の王に王位が収れんされ、唯一の王のもとに統治される領域は帝国と呼ばれるようになった。

帝国領は水母大陸の比較的冷涼乾燥した南西部を中心にひろがり、大陸の北西にひろがる広大な密林地帯はいまだ小国小邑が点在するばかりの未開の領土であった。

この頃、いつからともどこからとも知れず、大陸の北西部のひよくな森林地帯に、大河の流域に沿って点在するあらたな人々が住みついた。

この人々は帝国の一般的な人々と異って、肌の色が濃く、髪の色は黒く豊かな直毛が中心で、よく陽にやけて体格も大柄だった。

彼らは一人の王や帝王のもとに統治されることを好まず、木とつるなどのみで作られた大きな家々に主に血族と姻せき等からなる大家族単位で住み、なにか決めごとが必要なときには家のものすべて、また集落のすべての者が一堂に集まり、いく夜もの話し合いをへなければ、決めることがなかった。

帝国は彼らが臣従せぬのを許し、またその領域たる谷の森は侵さぬことを約し、代わりに毎年数百人の武人を帝国にさしだすよう求めた。

谷の一族はすぐれた狩人であり、帝土の政争にくみせぬ、忠実な護えいとしてよくつとめた。

また、流芸人を多く出し、大陸全土に季節ごとに旅して歩く、彼の姿は見られるようになった。

神を持たぬ帝国の民と異なり、谷の人々は数々の神と神話を語った。

2-6. 山脈隆起と月女神（教）信仰 (2009.04.13.)

[2-6. 山脈隆起と月女神（教）信仰 \(2009.04.13.\)](#)

2016年7月15日 [リステラス星圏史略 \(創作\)](#)

2-6. 山脈隆起と月女神（教）信仰 -ハユンのアマラーサー-

帝国歴____年、はげしい地鳴りと悪天候が続き、人々はキモをつぶし、ありえない神を思った。

天変地災の数年が過ぎ、ようやく終息する頃、人々は水母大陸の中央をつらぬき巨大な岩塊が信じられぬ高さでそびえ立っているのを知った。

平坦であった水母大陸に火山性の山脈がそびえたったのである。

ためにその四方の気候は変わり、交通は途絶えた。

人々は山脈というものをそれまで知らなかったゆえに、それを恐れ、また無事に踏破する技術も知らなかったのである。

しかし帝国歴____年、ハユンのアマラーサとその夫によって壁は破られ、大陸の東西を結ぶ交易路が再開した。

やがて高地をつらぬく隊商路と隊商相手にあきなう定住の村が出来、中央高地には独自の薬草を狩るプランテーションが拓かれた。

女戦士ハユンのアマラーサはまた、月女神信仰の基ともなった。

この時代、水母帝国における女性の地位はごく低く、政略婚を強いられる女性たちが自由を求め、谷の一族の神話に語る月女神に救いを求め、多くは命をおとす、ついには山岳の中にそれをあわれんだ月女神レリナルその人の降臨があり、長く神殿は栄えた。

2-7. 第一次天船来襲 (2009.04.16.)

[2-7. 第一次天船来襲 \(2009.04.16.\)](#)

2016年7月15日 [リステラス星圏史略 \(創作\)](#)

2-7. 第一次天船来襲

ある日突然、巨大な火球群が水母大陸全域におそいかかった。

おりあしく秋の乾季であった大陸北西の"谷" 一帯はまたたくまに燃え広がる火炎につつまれた。人々は泣き叫び火だるまになりながら、ある者は大河に身を投じて村ぐるみで海へと逃れ、またある村では燃ゆるもののない岩山高く逃げ登って、炎上する大樹の森を眺めおろし呆然とすわりこんだ。

天より降り落ちた巨大な火球の毒と熱のため、かの地には長く草木が戻らず、ためにこの時まで"谷" の一族と呼ばれた人々は安住の地を失い、これより後、流浪の民として支族ごとにその生業とする職能をあらわす色で呼ばれ、"色の七支族" または"虹の一族" と呼ばれるようになった。

火球群はまた水母大陸のすみずみ各地までをくまなく襲った。

雨季であった北東と南部は広範な被害はまぬがれたが、帝都時まさに先帝の崩御にともない、次帝選びのため全ての王族と帝位継承権者が参集していた帝都は火球群の大津波をうけて一瞬にして瓦解した。

軍や官僚を統率するべき王族と帝臣らをすべて失い、火球群に追われる人々はただ右往左往して逃げまどった。

そこへ天船群が降下し、人々は狩られるままになるかと思えた。

が、混乱の半年の後、庶出のため帝位継承争いからはずされていた一人の帝子が立ち、軍をまとめ反げきに出た。

攻防四年。ついに帝都はだっかんされ復興を果たし、帝庶子____により新帝家がきずかれ、水母大陸は再び安定し、栄えた。

p.11 090416

2－8．身分制度と女性の地位（2009年）

2－8．身分制度と女性の地位（2009年）

2016年7月15日 リステラス星圏史略（創作）

2－8．身分制度と女性の地位

天船より下って水母大陸に攻め入り、新帝（復興帝）____により追いつめられ捕えられた人々は、すべて殺すにはあまりにも漠大にすぎ、また哀れでもあったので、ある獄野と名づけられた数ヶ所の荘園に集められた。

彼らはひとたび敗北が決すると、ひれふして新帝の慈悲を乞い、ただ生きることと彼らの神を拝する自由とだけを求めた。新帝はそれをいれた。

彼らはみな小柄で外見上、男女の性差にとぼしく、女も武具を持って戦うという一方で、男の戦士でも水母大陸の女の胸ほどの高さしかなかった。肌の色は黄土色で、髪は焦げたような黒かこげ茶、多くはくわっているかちぢれている者も多かった。

荒野の農園やくらい鉱山の奥、きびしい北海の漁などに奴隷として従事せしめられた、そのひよわな外見に反してよく耐え、みな長命だった。

やがて、その女たち

（未完）

リステラス星圏史略
古資料ファイル
1 - 2
『創球神話』

<http://p.booklog.jp/book/108564>

著者：霧樹里守 is 土岐真扉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/108564>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/108564>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ